

# 日中交流：異文化間の対話

北京語言大学学生代表

見学日時：2024年12月3日（火）14:00-19:00

見学場所：一橋大学

## 見学概要

午後、私たちは胸を躍らせながら、この名誉ある一橋大学に足を踏み入れた。京都大学の自由でおおらかな雰囲気とは異なり、一橋大学のキャンパスからは古式蒼然たる西洋風古典建築の美学が色濃く感じられた。また京都大学と比べ、ここには沢山の中国人留学生が集まっていただけでなく、中国語が堪能な日本人学生も多く、多元的文化的交流の場を形成していた。そのため互いの交流もよりスムーズであった。

現代感に満ちたキャンパスの見学を終えた私たちは小グループでの討論会に参加した。京都大学での弁論式とは異なり、一橋大学ではグループごとのテーマ討論で、テーマ自体も生活により密着したものであった。1回目の討論では皆が机を囲むように座り、各々が多彩な大学生活を紹介した。中国の学生らはカリキュラムの設定、講義の様子そして課外活動といった彼らの普段の学習の様子を紹介すると共に、講義以外の時間におけるサークル活動、スポーツ及び文化体験等の娯楽活動についても紹介するなど、現代の中国人学生の前向きで向上心があり多芸多才という様々な側面を示していた。

2回目の討論ではテーマがよりプライベートなものになった。私たちは一橋大学と中央大学の学生らと共に各々の地元について紹介した。雄大な自然景観から食欲をそそる各地の美食まで、それらはいずれも魅力的で、まるで自分がその場に居るかのように異なる地域の文化が持つ独自の魅力を感じることができた。このセッションではお互いへの理解が深まった他、文化交流を促進することができた。

その後の討論では、現実的で切実な問題、すなわち中国の大学生が直面している就職難にフォーカスが当てられた。学生らは教育リソースの配分における不均衡、業界における競争の激しさ及び社会の期待値が過度に高い等の要素を含め、こうした現象が生まれた原因の分析を行った。特に「内向き競争」現象の深刻化は多くの優秀な新卒者の就職活動を困難に満ちたものとしている。対して、日本人学生の卒業後の就職状況は比較的楽観視できるもので、この点は両国の教育体系及び就活市場についての深い考察を促した。

ちなみに、今回の交流会には韓国人留学生1名も特別に招待され討論に参加していた。彼からは韓国社会が現在直面している低出生率及び人口高齢化の問題について紹介があり、この話題は同様に幅広い注目や議論を呼んだ。日中韓の三国のこうした問題への対応策の比較を通じて、私たちは視野が広がっただけでなく、将来的に可能な提携の方向性についてよりはっきりとした認識を得ることができた。

夜のどばりがゆっくりと降り、1日の交流活動も和やかで楽しい懇親会によってすばらしいピリオドが打たれた。日本の学生らはとても友好的且つ親切で、自身の大学生活や中国への印象について語ってくれた。また中国人留学生らは旧友と再会したかのように私たちを手厚くもてなし、親切にキャンパスを案内してくれ、討論にも積極的に参加してくれた。美味しい料理と明るい笑顔が交わることで私たちの距離も縮まったのみならず、今回の日本訪問における忘れ難い思い出をつくることができた。今回の交流は知識のぶつかり合いである以上に心の交わりであり、私たちに未来への期待と憧れを抱かせてくれた。



## ご存じですか？

問：一橋大学における著名な人物は？

答：一橋大学における非常に著名な人物としては、「日本資本主義の父」と称され、近代日本経済の基盤を確立した渋沢栄一が挙げられる。渋沢栄一の影響力は経済及び教育分野に示されているのみならず、自身の著書『論語と算盤』を通じて彼は「道徳経済合一」説を提唱し、企業経営においては道徳と経済を両立させる必要があるとの考えを示すなど、彼の思想や業績は今なお日本社会に多大な影響を及ぼしており、2024年には彼の肖像が新1万円札のデザインに選ばれている。

## 感想

一橋大学への訪問ならびに日中両国の学生との交流において、私は日中両国の教育分野における交流や提携の現状そしてそのポテンシャルに強く心を打たれた。特に「内向き競争」現象や就職難に関する討論において、私は両国の青年が直面している課題について理解がより深まったと同時に、相互理解や相互支援の促進における文化交流の重要な役割についても知ることができた。

中国では、高等教育の普及に伴い若者が大学教育を受ける機会がますます増えているが、これにより就活市場での競争が激しくなっている。特に一線都市や人気の業界において新卒者は非常に大きなプレッシャーに直面しており、こうした現象は若者のキャリアアップに悪影響を及ぼしているだけでなく、彼らの心の健康状態にも不利な影響を及ぼしている。「内向き競争」現象による厳しい競争環境に、多くの若者は焦りや救いのなさを感じている他、ひいては自身の価値や未来についても疑問視し始めている。

対して、日本の大学生の卒業後の就職状況は比較的安定していると見受けられる。そしてこの背後にある原因に

については、日本社会の職業教育への重視、企業文化や求人制度の違い等多方面に及んでいる。日本企業は求人の際、学歴だけでなく、従業員の長期的な成長可能性や個人の資質を重視する傾向にある。こうした違いは採用基準のみならず、日本社会による若者の成長に対する様々な支援にも表れている。

一橋大学及び中央大学の学生との交流を通じ、私は青年の就職難への対応に関して日中両国が異なる経験と手法を有していることを知った。中国としては、盲目的に高学歴を追求するのではなく、職業教育及び継続教育のシステム構築を強化することで学生の興味や長所を基にしたキャリアパス選択を推奨するなど、日本の実務からインスピレーションを受けることが可能であると同時に、企業や社会においてもより多様化した就職機会や発展の場を提供することで若者の就職におけるプレッシャーを軽減する必要があると思う。

またより重要なのは、このような異文化間交流自体が重要な架け橋であるとの点であり、こうした交流は私たちが互いの社会や文化的背景について理解する手助けとなるだけでなく、両国の青年に相互学習及び相互啓発の場を提供している。経験の共有や問題への検討を通じて、私たちは解決の道を見出すなど両国の青年の共同発展を推し進めることができる。このプロセスにおいて、文化交流は単なる情報伝達にとどまらず、感情の連結そして知識のぶつかり合いでもあり、私たちはそこから提携の可能性や希望を見出すことができる。

よって日中両国の文化交流は表面的な交流である以上に、より深いレベルでの思想及び心の交流であり、こうした交流は文化の壁を取り払い、相互理解と尊重を深める助けとなるなど、より調和のとれた世界の構築のための知恵と力になると思う。